

## 物の貸し借り場面にみられる所有意識の推移

## How does the consciousness of possession change when lending and borrowing a thing?

小湊 真衣 (Mai Kominato) 指導: 野嶋 栄一郎

## 1. 研究の目的

本論文は、物の貸借場面にみられる貸主と借主の所有意識の推移現象の検討を通し、日常生活における所有意識のあり方について考察することを試みたものである。所有というテーマは、法学、社会学、哲学、心理学等の学問領域において論じられているが、これまで所有は「所有か非所有か」という二分法の図式でとらえられることが大半であった。本論文ではまず、日常生活場面における所有意識はこうした二分法で割り切れるものではなく、連続体として存在しているという立場から、それを検証するための実験調査を実施した。また、従来の所有研究において、幼児は物支配の事実と所有の権利とを結びつけてとらえる傾向にあり、その後発達が進むにつれ物支配の事実と所有の権利を切り離してとらえることが可能になると考えられてきたが、本論文ではこうした所有判断の原則における発達的变化の一方向性における再考の余地を指摘し、所有原則の獲得過程に関してより多角的視点から検討することの必要性を提案した。

## 2. 主な実験調査の方法と概要

## 2.1. 物の貸借場面における所有意識の推移の検討

物に対する所有意識は「所有か非所有か」という明確な分かれ方をしていいるのではなく、もっと流動的かつ曖昧に変化するものとして存在しているのではないかという観点から、友人同士の物の貸借場面における貸主と借主双方の所有意識の推移について、質問紙式の実験調査を行った。

## 2.1.1. 貸主側の所有意識の推移

**調査協力者と手続き** 2004年の5月から10月にかけて、関東近郊の大学・大学院・専門学校に通う学生291名（男性179名、女性108名、無回答4名）を対象として質問紙式の調査を実施した。調査協力者の平均年齢は20.03歳（SD=2.19）であった。

**質問紙の構成** 「本」、「ボールペン」、「ノート」を友人に貸すシナリオを作成し、貸与期間に応じて「そのものをどの程度自分のものだと思うか（所有意識）」を尋ねた。所有意識は、「0%（全く自分のものではない）」から「100%（完全に自分のものである）」まで10%きざみの11件法で回答を求めた。シナリオ上の貸与期間は便宜上「2・3日」、「10日」、「1ヶ月」、「1年」、「5年」の5種類を設定した。

**結果** 貸与物ごとの所有意識の推移をFigure 1に示す。所有意識に対する貸与期間の影響を検討するため、被験者内要因のみの1要因分散分析を行った。その結果、いずれの貸与物においても所有意識の推移に対する貸与期間の主効果が認められ（ $F(4, 506)=271.69, p<.001$ ;  $F(4, 545)=398.83$ ,

$p<.001$ ;  $F(4, 474)=336.62, p<.001$ ）、貸主の所有意識が貸与期間の経過と共に減少する傾向が示された。また、分析結果から、所有意識の推移の度合いは貸与物の性質によって左右される可能性が示唆された。特にボールペンを貸した場合の所有意識は本やノートに比べ、いずれの貸与期間においても所有意識が低くなる傾向が見受けられた。

## 2.1.2. 借主側の所有意識の推移

**調査協力者と手続き** 2004年の5月から10月にかけて、関東近郊の大学・大学院・専門学校、計5校通う学生486名（男性196名・女性290名）を対象として質問紙式の調査を実施した。調査協力者の平均年齢は20.38歳（SD=2.94）であった。

**質問紙の構成** 「本」、「ボールペン」、「ノート」を友人から借りるシナリオを作成し、借用期間に応じて「そのものをどの程度自分のものだと思うか（所有意識）」を尋ねた。所有意識の回答方式およびシナリオ上の貸与期間は「2.1.1. 貸主側の所有意識の変化」で用いた質問紙と同様のものを用いた。

**結果** 借用物ごとの所有意識の推移をFigure 2に示す。所有意識に対する借用期間の影響を検討するため、被験者内要因のみの1要因分散分析を行った。その結果、いずれの借用物においても所有意識の推移に対する借用期間の主効果が認められ（ $F(4, 2307)=146.62, p<.001$ ;  $F(4, 2415)=322.90, p<.001$ ;  $F(4, 2410)=233.61, p<.001$ ）、借主の所有意識が時間経過と共に増加する傾向が示唆された。また、分析結果から、所有意識の変化の度合いは借用物の性質によって左右される可能性も示唆された。特にボールペンを借りた場合の所有意識は、「本」や「ノート」を借りた場合と比べて増加しやすい傾向が見受けられた。

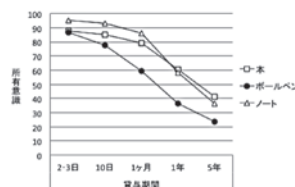


Figure 1 貸与物の所有意識の推移(大学生)

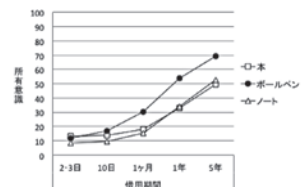


Figure 2 借用物の所有意識の推移(大学生)

## 2.2. 物の貸借場面における所有意識の推移現象に対する発達の側面からの検討

次に、所有意識の推移現象を発達の側面から検討する為、小学生、中学生、高校生および大学生・大学院生・専門学校生を対象とした一連の調査のうち、共通の質問における結果を比較し再分析を行った

**調査協力者と手続き** 高校2年生314名（男性148名・女性

166名)を対象とした調査は2004年の5月から10月にかけて、中学2年生124名(男性67名・女性57名)を対象とした調査は2004年の5月から10月にかけて、小学5年生および小学6年生、計205名(男子101名、女子104名)を対象とした調査は2004年7月および2006年9月に実施された。

**結果** 貸主の所有意識に対する年齢の影響を検討するため、被験者内要因のみの1要因分散分析を行った。その結果、「2・3日」では年齢の主効果が有意ではなく( $F(25, 1528)=1.30, n.s.$ )、「10日」では主効果が有意である可能性が示唆された( $F(25, 1528)=1.56, p<.05$ )。一方、「1ヶ月」、「1年」、「5年」においては所有意識の推移に対する年齢の主効果が認められた( $F(25, 1527)=1.88, p<.01$ ;  $F(25, 1528)=4.42, p<.001$ ;  $F(25, 1527)=8.59, p<.001$ )。このことから、本を貸した場合、貸した直後はどの年齢層においても所有意識は高めであり、年齢による有為な差は見受けられないが、貸与期間が経過するにしたがい、所有意識の減少幅に差が生じてくる可能性が示唆された。

借主の所有意識に対する年齢の影響を検討するため、同じく被験者内要因のみの1要因分散分析を行った。その結果、「2・3日」と「10日」では年齢の主効果が有意ではなく( $F(22, 1240)=0.68, n.s.$ ;  $F(22, 1238)=0.89, n.s.$ )、「1ヶ月」では年齢の主効果が有意である可能性が示唆された( $F(22, 1239)=1.63, p<.05$ )。一方、「1年」と「5年」においては所有意識の推移に対する年齢の主効果が有意であった( $F(22, 1239)=3.70, p<.001$ ;  $F(22, 1240)=5.82, p<.001$ )。このことから、本を友人から借りた場合、借りた直後の所有意識が低い点はどの年齢も共通しているが、借用期間が長くなった場合、所有意識の増加の程度には年齢差がみられる可能性が示唆されたといえる。

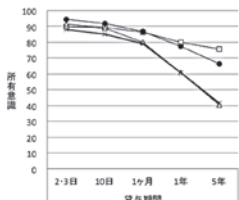


Figure 3 本に対する貸主の所有意識の推移(日本)

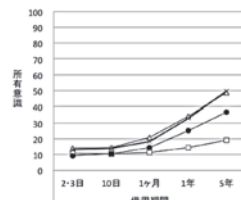


Figure 4 本に対する借主の所有意識の推移(日本)

### 2.3. 物の貸借場面における所有意識の推移現象に対する文化的側面からの検討

物の貸借場面で見られる貸主と借主の所有意識の推移現象における普遍性について検討するため、日本、中国、韓国において幼稚園もしくは保育園に通う幼児を養育している保護者を対象とした調査を実施した。

**調査協力者と手続き** 日本での調査は2004年5月に関東近郊の保育園もしくは幼稚園に子どもを通園させている保護者を対象に行い、228名の協力を得た。中国での調査は2004年9月に蘭州及び北京の幼稚園に協力を求める形で行われ、252名の協力を得た。韓国での調査は2004年6月にソウルの園に協力を求める形で行われ、163名の協力を得た。なお、調査協力者の年齢および性別は3カ国とも実施園より保護者のプライバシーへの配慮を求められた関係により記入を

求めなかった。また、インドネシアのバンドンにある大学の学生67名(男性15名・女性42名・不明10名)を対象とし、2010年の4月から2011年の9月にかけて質問紙式調査を実施した。

**結果** 日本・中国・韓国の幼児の保護者を対象とした所有意識の推移の平均をFigure5-6に、日本の大学生とインドネシアの大学生を対象とした所有意識の推移の平均をFigure7-8に示す。分析の結果、中国、韓国、インドネシアのいずれにおいても、友人同士の物の貸借場面においてみられる所有意識の増減現象が、日本の調査協力者を対象とした調査で見受けられたのと同様に確認された。

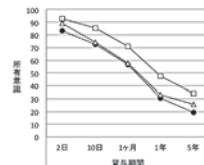


Figure 5 ボールペンに対する貸主の所有意識の推移(保護者対象)

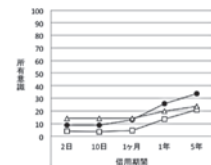


Figure 6 ボールペンに対する借主の所有意識の推移(保護者対象)

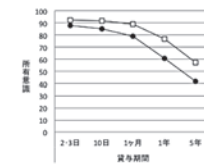


Figure 7 本に対する貸主の所有意識の比較

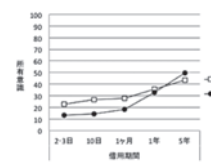


Figure 8 本に対する借主の所有意識の比較

### 3. まとめと考察

一連の実験調査の結果から、友人同士の物の貸借場面において、貸主の所有意識は貸与時間の経過とともに減少し、借主の所有意識は借用時間の経過とともに増加するという所有意識の推移現象が見られることが確認された。そしてこの現象は、日本においては小学生から大学生および幼児の保護者に、中国と韓国においては幼児の保護者に、インドネシアにおいては大学生に、広く見受けられたことから、本論文中で検証された所有意識の増減に関する原則には文化差を超えた一定の普遍性がみられることが示唆された。

従来の所有研究において所有は「所有か非所有か」という二分法でとらえられてきたが、「所有」と「非所有」は対立概念であるというよりも、心理学的連続体上に位置するものであり、二者択一的な次元で所有をとらえることは、現実生活におけるヒトの所有行動の実態を必ずしも正しく反映しているとはいえないことが示唆された。また従来、幼児は所有の判断において原始的所有の原則を用い、発達が進むと近代法的所有の原則を理解することができるようになると考えられてきたが、近代法的所有原則の獲得は原始的所有の原則の喪失を意味しているわけではなく、その両者は併存している可能性が示唆された。また、社会化することにより近代法的所有の原則と原始的所有の原則を状況に応じて使い分ける能力が促進される可能性について考える必要性も示唆されたといえる。今回の調査は全てシナリオ式の質問紙を用いていたため、今後はインタビュー調査や実験室での調査等を適宜交えることを視野に入れつつ、より現実的な人の所有意識のありかたに迫れるような調査のデザインを構築することが課題である。